



天安門でのレッスン

私は、2007年、上司から思いがけなく中国での仕事を打診された。私はもともと韓国が専門で、韓国には計4年暮らしたことがあるが、北京は意外だった。

今や中国は世界の工場だ。わが社も中国の事務所を拡充していた。そこに送り込まれるのは名誉でもあった。

事務所は、北京の中心地、建国門のビルにあった。日本人スタッフ5人、現地スタッフ3人の小さな所帯だった。

引っ越し、外国人としての手続きに追われた。それも一段落すると、急に寂しさが募ってきた。私は結婚し中学生になる娘もいたが、家内とはじっくりいっておらず、単身赴任だった。

「やっぱり家族を連れてくるべきだったか」

「いや、しばらく離れていたほうがお互いのためになる」

仕事の合間にぼんやりとそんなことを考えていた。

しかし、慣れない北京での1人暮らしの生活は楽ではなかった。言葉が分からない、話しても通じない。もともと中国に関心がなかったので、生活していても興味が持てない。中国人は外国人にそう人なつっこく接してこない。

私は韓国に計4年暮らした経験がある。ちょっと感情に走りやすいものの、情の厚い韓国人が懐かしくてたまらなかった。

そんな中、友人とある飲食店に行ってレジのアルバイトをしていた彼女と知り合った。その飲食店は、国貿ホテルという高級ホテルの近くにあった。中国人の若い女性が、日本人のサラリーマンの話し相手になる、いわゆる日本式スナックだ。

彼女は私よりもやや背が低く160センチくらい。丸顔で、ニキビも目立った。高校生と言っても通じただろう。いつも地味な服装をしていた。「毎日カップラーメンを食べている」と話した。

大学を卒業したばかりで、昼は旅行社、夜は飲食店でバイトと2つ仕事をもっていた。何回か雑談しているうちに時々、中国語を教えてもらうことになった。喫茶店で合って、簡単な会話をした。私はしらずしらずに自分のことを話し出していた。下手な中国語を何時間もじっと聞いてくれ、「辛苦了」と慰めてくれる。

この頃私は、彼女の話すゆっくりとした中国語が半分くらいしか分からなかった。それでも心が通じた気がした。世界でたった1人の私の理解者、大げさではなくそう思った。それはたまたま中国人の女性だった。

冬だった。私と彼女は2人で喫茶店を出て、気分転換に天安門広場の周りを何回も歩いた。

そしてまた話をした。天安門広場は、北京の中心だ。

ここで民主化を求める天安門事件が起きたのは、1989年の6月4日だ。大勢の学生が、この広場に座り込み、詩を読んで、自由を夢見た。

中国は、当時まだ混乱していた。彼らの主張を許したら、国が滅びると指導者は思い、戦車を繰り出して、学生たちを蹴散らした。

今もこの広場には、無表情で立っている武装警察官がたくさん立っている。

たどたどしい中国語を話す日本の中年男と、若い女性の組み合わせは、彼らにさぞ奇異に映っていただろう。

漢字だけの携帯メール

彼女は飲食店の寄宿舍に住んでいた。4人1部屋だという。仕事が終わってからいつも私に携帯メールをくれた。夜12時になることもあり、1時を回ることもあった。

もちろん漢字だけ。まるで昔高校時代に読んだ李白とか王維といった人たちの唐詩のような趣がある。言葉では聞き取れなくても、日本人なら、漢字になればだいたい意味は分かるものだ。

当時の中国の携帯は、メールをパソコンに保存したりすることができなかった。何通かたまってくると警告がでるので削除するしかなかった。彼女のメールも削除してしまったのだが、たとえばこんな内容だった。

先生，ニイ好マ？現在在做什マ？ 今天開心マ？越来越冷了，多穿些衣服，別感冒了。好好吃飯，工作不要太辛苦了。祝開心的每一天。

お元気ですか。楽しく暮らしていますか。寒さが厳しくなってきました。服を多く着て、ご飯をしっかり食べてくださいね。お疲れ様です。

一日にそれこそ10通ほど届くこともあった。

硬い漢字だけのメールだったが、疑り深い私の心を溶かす、温かい雨粒のような効果を発揮した。携帯電話でメールを打つには、中国語の発音であるピンインを使うのだが、私の場合、ピンインが分からず、1字1字辞書を引かなければいけない。返事は10回に1回、それも「謝謝」など簡単なもので、彼女はずいぶん落胆したそうである。

帰国命令

私達は、店で話をしたり、ふたりで食事に行き、次第に親しくなっていた。最後の一線だけは越えなかった。

外国で勤務し、現地で女性とトラブルになれば、即帰国を命令される。日本には私を温かく迎えてくれる家はなかった。

そうやって過ごすうちに私は帰国することになった。3年間の任期が終わったのだ。

帰国の準備を進めている私に対して、彼女は夜道で突然こういった。

「あなたのことを愛している。日本に行きたい」—うれしいというより、何か勘違いしているのではないかと思った。確かに「我愛ニ」と聞こえたが、中国語では、これは親しみの表現なのかもしれない。

まさか二回り違う私に愛していると言うわけがない。なんだか笑いがこみ上げてきて、怒りに変わった。

「そんなに若くて、簡単に愛しているなんていうものじゃない」「俺を騙そうとしているだろう」。私も言い方が直接的になっていた。

しかし彼女は真剣だった。

「お金も家も何もいないね。あなたとイッショニにいたいね。必ず日本に行く。行けなかったら何年でもここで待っている」

とたどたどしい日本語で言う。

日本ではここまではっきり自分の気持ちを言う女性に会ったことがなかった。まるで別の世界から来たエイリアンのようにまぶしかった。

彼女には母親がいなかった。彼女が北京の大学に通い、国際貿易を学んでいた時、母親は故郷のハルピンで交通事故に遭った。2ヶ月ほど治療したが、甲斐なく亡くなってしまった。

父親も悲しんだ。葬式の時、「もう生きていけない」と親戚に言って泣き崩れた。

しかし、半年もしないうちに新しい女性を見つけた。そして同居をはじめ、彼女とは連絡を取らなくなった。

彼女にも家族がいなかった。

空に丸く、白い月が出ていた。今日はやけに大きく見える。

「あんたは男だろう。なにをかりかりしてるうんだ。さ、聞いてあげなよ」とでも言いたげな優しい光を放っていた。

そうぞうしい車の音がふうっと消えた。

彼女は道ばたの植え込みに上がって、私を手招きする。近寄ると私の頭の部分を抱きしめた。気持ちを分かってほしいという意味らしい。

柔らかい抱擁だった。しばらく、10分ほどだろうか。そうしていた。この瞬間が永遠に続いてほしいと思った。

私は、単純な人間だ。ここまで真剣に言ってくれるなら、応えてあげようと考えた。その感情はぎくしゃくした愛情の芽生えと言えるものだったかもしれない。

私はまず帰国した後、彼女を日本に呼び寄せようと計画を立て、そう説明した。彼女の友人は「あの人は絶対にあんたを捨てるよ」「日本人は、中国人の女を遊び相手と考えているから」と話していたそうである。

日本人向けのスナックは、北京だけで100軒はある。ほとんどが田舎から来た若い女の子たちだ。したたかに日本人男性を手玉にする子もいるが、年上で優しい日本人男性と恋に落ち、妊娠して流産させられ、拳げ句に捨てられてしまう子もいる。

私は、何人かそういう子を見てきた。

日本にいる私に友人に相談してみた。

「歳も違い、国籍も違う。大丈夫？ 中国人ってこわくないか」と真剣に心配してくれた。

結局私は、3年かけて離婚した。家裁の調停を経て、最後には裁判になったが、金銭的には相手の言うとおりの条件を受け入れた。

家庭裁判所に呼び出されて、裁判長から「もうやり直す気持ちはないですね」と聞かれた。

私は、一瞬考えて首を横に振った。

そして、ようやく結婚した。いろいろな事情があって結婚式は挙げていない。
日本では結婚写真を撮った。

3枚で5万円だった。

ウエディングドレスを着て、衣装室から出てきた彼女を見て、私は彼女の父親になったような
気持ちがした。

しかし、結婚相手はこの私だ。

二回りの差

ふたりの年齢差は大きい。

知り合ってからしばらくして、彼女に干支を聞いたことがある。年齢を聞くのは失礼だから遠回しに聞いたのだ。「イヌ年」と答えた。中国と日本では、干支はほぼ同じだ。私もイヌ年だから12年離れていると勘違いした。

しかし、話を聞くと最近北京の大学を卒業したばかりだという。それなら年はもっと離れているはずだ。よく聞くと、2回り、つまり24歳離れていた。

愕然となった。「お父さんはいくつなの」「52歳」—ってことは私と10歳も離れていない。

そういえば、北京にある日本人向けのスナックで、親子ほど年の離れた日本人と中国人の夫婦に何回か出会った。

夫の方はたいてい会社の社長か、日本レストランのオーナーである。話すのはゴルフと不動産の話だった。

金ならいくらでもあるように見えた。女性の従業員にチップをはずみ、テレサテンの歌を中国語で歌う。だいたいパターンは決まっていた。正直、私はややうさんくさく感じた。

しかし、私が付き合おうと考え出していた女性が、こんなに若いとは想像も付かなかった。それだけに腰が引けた。

一方で、思い切って彼女に、これからの人生をかけてみたいと思った。

驚き

日本で暮らしはじめ、戸惑ったことは彼女は将来を語りたがることだった。

二〇年後、三〇年後はこういう生活をして、こんな毎日を送ろう。宝くじを買って3億円入ったらどうする。北京に大きな別荘を買おう—最初は、彼女の話が空疎な絵空事に思えてしかたなかった。

まてよ。問題は私のほうじゃないだろうか。中年から初老になって私は先のことを考えなくなっていた。仕事中心で、自分の生活は二の次。

そういう生活に慣れきって夢を語ることを忘れていた。もちろん私に残された時間は多くはないが、順調にいけばあと30年はある。間違いなく折り返し地点は過ぎただろうが、もっと大きな世界を考えてもいいじゃないか。

それからは、新しい家を買うとか、まだ生まれてもいないが、子供が大きく成長した時のことなど、一緒に未来を語ろう。誰にも迷惑がかかる訳ではない。

もう1つは、彼女が心の中にあることを率直に話すことだ。誰かのことが好きか、きらいか。何かがほしい、ほしくない。

機嫌が悪い時には、もっと過激なことを口にする。遠慮という言葉を知らないようだ。

だからデパートに行くと大変だ。片っ端から買いたい買いたいという。グッチ、エルメス、フェンディー。

最初は本気にして、心の中ではらはらしていたが、彼女はこう意味のことを言う。

「小さい時から親はなんでも買ってくれていた。だからすぐにねだってしまうが、一種の癖みたいなものだから」。

わたしも気軽に「じゃ、買おうか。どの色がいい」と合わせる。

すると彼女の方から、「ちょっと待って、考えてみる」。

これはきっと中国の一人っ子政策がもたらした部分ではないかと思うが、同時に私も成長したのかもしれない。

●すべては健康のために

妻が若いというのは、プレッシャーにもなる。一度外出していて知り合いに出会った。相手は「ずいぶん大きな娘さんがいるんですね。うらやましい」と挨拶してきた。

その人と立ち話をして別れた後、妻が「ムスメ？」と聞いてきた。「おまえが私の娘だって」と笑って説明すると、「没有礼貌」（礼儀知らず）とぷりぷりしていた。

孫と思われなくてよかったが、この事件以来、私は外出するときには外見に気を遣うことにした。髭は必ずきれいにそる。頭は染めて白髪を目立たなくする。なるべく引き締まった服を着る。これだけで10歳は若返る。

さらに薬局に通って、皮膚によさそうなものは片っ端から試した。ヒアルロン酸とか、コエンザイムといった成分が入ったクリームは必ず試す。

夫婦生活はどうなのかと思うかもしれない。ごく普通のペースである。ただし、私が見ている妻は日本に来てから、明らかにそちらの方面に関心を高めている。週刊誌のグラビアを見たり、記事を読んだりして知識を蓄えたようだ。下着売り場で長い時間を過ごすこともある。

一方中国にいる妻の友人たちも結婚のピークを迎えている。パソコンでチャットしていると「夫が1晩4回求めてくる。今日は疲れて動けない」と自慢する友人がいるらしい。

中国では、精力的な男性は英雄視される。精力剤もさまざまなものが出回っている。「虎男」とか「猛男」なんて名前がついている。

うかつに飲んで、朝になったら全身に黄色い毛が生えていた。下半身だけ馬になって勝手に走り出した—そんな空想が頭を駆けめぐった。

我々の人生は今後どうなっていくのか。私にも彼女にも分からないが、北京の夜空で見た月が、どこかで私達を見守ってくれているような気がする。

新潟での生活

離婚まで3年かかったことは書いた。その間中国から来た彼女、崔麗麗は数ヶ月ずつ、新潟にある私の実家で暮らした。

両親も驚いたに違いない。結婚している私が、中国から若い女性を連れ帰ったのだから。

しかし2人とも特には反対しなかった。むしろ「娘ができた」と喜んだ。実家は農家だから、彼女にたんぼや畑仕事を手伝ってもらった。

最初に日本に来たのは3月だった。まだ新潟は寒い。暖房もこたつ中心である。

最も寒いときには零下20度にもなる北京では、一般的に「暖気」と呼ばれる高温の蒸気が各戸に無料で送られてくる。だから家の中は下着でいられるほど暖かい。

その身体になれている麗麗は、日本の冬が寒くて仕方なかった。

夜私達はスカイプで話をした。簡単なカメラを付けての対話だったが、私の顔がパソコンに写るなり、麗麗は泣き出し「サムイ、サムイ」を繰り返した。

私は懸命に慰めた。私は、祝福されることの少なかった彼女の人生を、さらに矮小化してしまったようで、気持ちが暗く沈んだ。

しかし、若い麗麗は徐々に新潟に慣れていった。4月から5月にかけては農作業のシーズンだ。

実家に連絡するたびに、「今日は苗を植えた」「苗が大きくなった」「もうすぐ田植えだよ」と説明してくれた。

日本語しか通じない環境だったためか、日本語の上達も早い。

離婚裁判の方も、妻の姿勢が柔軟になってきた。裁判長は早く決着させ、子どもへの影響を避けたいと話した。

質問

私が帰国してから、家庭裁判所の離婚裁判は急速に進展した。この裁判は私が中国にいるときに訴えたものだ。長年家庭を放棄して、実家に帰ったままで、さらに私の給料を一人で勝手に使った。夫婦関係はなりたたないと主張した。離婚裁判は、家庭裁判所の調停を経て、初めて可能となる。

私も3回の調停を行ったが、妻は応じようとせず、さらに調停の日程を一方的に延ばしてきた。

当初、裁判長は私に厳しかった。

当然かもしれない。思春期の娘がいる中年男性が、離婚を申し出るだけでも不思議なことだ。たいてい、後ろに女性がいると疑うだろう。裁判長も同じ考えだったようだ。

離婚裁判は、テレビドラマで見るような被告と原告が同じ席にすわって、丁々発止でやりあうことはない。

お互いが順番に呼ばれて、裁判長から話を聞かれる。私のケースを担当した裁判長は60近い男性だった。

私が帰国するまでに、すでに数回、裁判が開かれていた。お互い書面で言い合うだけだった。私が初めて出席すると、裁判長はしばらく雑談した後

「奥さんは、あなたに中国人の彼女がいると話している。本当か。肉体関係はあったのか」と聞いてきた。

ちょっと、戸惑った。潔く認めた方がいいのか。どうせここまでもつれた夫婦関係だ。このまま首を縦に振っても同じことだ。

一方で、全て認めたら莫大な慰謝料を求められ、離婚後も生活がなりたたないのでは、という恐怖感もわいてきた。

しかし、思いがけない言葉が口からでた。

「肉体関係もありました。女性とはおつきあいしました。それは妻が家庭を顧みず、年に半分程度実家に帰ってしまったことから起きたことです。私に相談なく家の購入を決め、私の給料をすべて自分の口座に移し、私に使い道を教えない。それが原因です」

裁判長は少し驚いた表情になったが、ゆっくりうなずいた。

ガンバル

それで開廷となった。

私の弁護士は30代の女性で田中という。女性の弁護士が男性を弁護する方が、裁判長にアピールするという友人のアドバイスでわざわざ探した。

田中弁護士は「ああはっきり言った方が、結果的にはいいんです。よく言いましたね」と慰めてくれた。

本当のことを言ったまでだったが、自分が果てしなく汚れた存在のように思えた。私の気持ちは純粹だが、麗麗と私との関係は、端からみれば単なる不倫なのだろう。

裁判所の殺風景な廊下を歩いて外に出た。

麗麗は、その時新潟にある私の実家にいた。私が電話すると麗麗が出てきた。

「どうだった」

「全て話したよ。私は麗麗を愛してるって」

「アリガトウ、アリガトウ。ガンバル、ガンバル」

頑張るは、彼女が覚えた最初の日本語の一つだった。

和解成立

裁判というのは、ごくあっさりしたものだ。

月に1回のペースで開かれ、主張がかみ合わなければ、そこで終わり。夏休み、冬休みにかかれれば2ヶ月間開かれない。

離婚裁判は、引き延ばそうと思えばいくらでも引き延ばせる。

たとえば、こちらが、妻が家庭生活を放棄していたと主張すれば、相手は「次回に反論する」と言えば、それ以上は進まなくなる。

先の見えないトンネルを歩いているような気分で、一人で暮らしていた。

突然、裁判長を通して向こうの弁護士から「奥さんのお父さんが倒れた。もう争いたくない。具体的な和解金の交渉に入りたい」との連絡を受けた。

悪いがほっとした。一方で、自分の都合で幕引きを図ろうとすることに、内心憤りも感じたが、早く解決したいのはこちらも同じことだ。

具体的な数字をまとめてこちらの弁護士から裁判長に連絡した。たちまち話がまとまった。

裁判が和解するのはこんなに簡単なのか。

最後の裁判は、それこそとんとん拍子に進んだ。最終的に双方の意思を確認すると、裁判長が最終的な文章をまとめて、双方に提示した。

和解金に加え、娘の毎月の養育費、さらに高校の学費、大学に進学した場合には「双方が誠意を持って協議する」となっていた。

裁判が始まって3年が過ぎていた。初めて妻と弁護士が私達と同席した。

西日の差す部屋で、裁判長が合意書を読み上げた。最後に「子供の幸せを考え、合意書をしっかり守るように。守らない場合には、裁判所が強制執行を行うことを忘れないように」と付け加えた。

裁判は終了した。ようやくトンネルを抜け出した。いや、経済的な負担は軽くない。まだまだ本当の出口は先だ。ようやく先に光りが見えてきた。

娘とは長い間話をしていない。こういう結論になって申し訳ないが、私にも幸せになる権利はあるはずだ。そう自分に言い聞かせた。

相手方にお礼を言い、弁護士と合意書の内容を再度確認し、私は自宅に向かった。私は新潟に

いる麗麗に電話をした。

「全て終わったよ」

麗麗は「後悔していないでしょ。これから幸せ、幸せ」と短く答えた。

麗麗が東京に来て、一緒に役所に行き、婚姻届けを出した。その夜、自宅近くのレストランで、中国料理を食べた。刀削麺と呼ばれる、中国の西安の料理だ。

小麦粉を水で練った生地のを、小型の刀で切り落とし、大きな鍋でぐつぐつ煮る。味は、昔学校給食で食べたすいとんのような素朴な味だ。

祝福してくれる人はいない。結婚式も媒酌人もいないたったふたりだけのセレモニーだったが、言葉に表せない喜びがあった。

我々の新居は、私が以前住んでいた中古のマンションだった。できれば新居を購入して新しく出直したかったが、和解金の毎月の支払いが心にひっかかり、踏み切れなかった。

裁判を起こして和解すると、養育費は裁判所規定の数字になる。私の年齢や年収を勘案し、最も厳しい数字がはじき出されるのだ。

私のマンションの中には冷蔵庫くらいしかなかった。離婚が成立してから、以前の妻に家財道具を送ってしまったからだ。

せめて新しいものをつと思ひ、家具だけは新しく買うことにした。

麗麗は、家具選びに夢中になっていた。